
バー

竹仲法順

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バー

【Nコード】
N1491W

【作者名】
竹仲法順

【あらすじ】
会社役員の俺は勤務先からの帰りに、行き付けのバーで飲んでい
た。水割りを頼み、店のマスターと差し向かいで飲む。俺自身、妻
子と別れて独り身でいたし、バーで飲める夜を楽しみにしているの
だが……。

俺は街の中でも中心部にあるバーで飲んでた。会社役員で、いつも社の業務が終わってから、ゆっくりとこの酒場で飲む。カウンター席に座り、大抵水割りを頼んでいた。差し出されて一口飲むと体が熱くなり、溜まっていた心身の疲労が吹き飛ぶ。店内にはムードミュージックが掛かっていて、あちこちでタバコの紫煙しえんが上がり出す。洗練された大人の空間である以上、こういった店には常に客が入り浸るのだ。来店者は富裕層が多い。ここは安酒を出すような場所じゃなくて、幾分高いものが出る場だ。金は腐るほど持っているから、仕事が終われば常に来て、大枚を叩たたき飲んでた。何度この手の店に足を踏み入れたか見当が付かないし、はつきりとは覚えてない。ただ言えるのは、こういった場所ではある程度加齢した大人が飲むということだ。まかり間違っても学生などが来る場所じゃない。学生がコンパなどで行くのはバーじゃなくて安手の居酒屋などで十分なのである。その夜も飲んでた。いくらか疲れが溜まっていたのだが、それもアルコールを含めば吹き飛ぶ。

*

「富樫さん」

「何だい？」

「お疲れでしょう？」

「ああ。……どうして分かった？」

「そりゃ分かりますよ。長年ずつとお付き合いさせていただいてますから」

「そうだね。あんたとはもう長いからな」

「確か富樫さんが会社を立ち上げられた日に、このバーでお酒飲まれましたよね？」

「うん。あのときのことは今でもはっきり覚えてる。船出の日だった

「だからな」

「そうでしょう。張り切つてらっしゃいましたからね」

俺の差し向かいにいる、白髪頭に髭を伸ばした初老の男性が店のマスターだ。この店で酒を飲むときはずっとこのマスターに相手してもらい、酒を飲んで愚痴も言い合う。人生におけるかけがえのない友人だ。今、俺の体調が心身ともに優すぐれないこともこの男は知っている。お互い空気みたいな感じなので、手に取るように分かり合えていた。それだけ苦楽を共にしてきた人間同士なのだ。

「私がして差し上げられることは何でしょう？」

マスターはわざと俺に向かい、鎌を掛けるような感じで言う。
る。

「とにかく美味しい酒くれよ。マスターが作ってくれるカクテルとか水割りは最高だからな」

「そうですか。私はいくら業界に長く居続けてるって言っても、バーのマスターのレベルで言えば中の下ぐらいですよ」

「それでいいんだ。俺は何も特別高い酒とか、過剰かじょうなサービスを要求してるわけじゃない。単に寛げる場所が欲しいんだよ。これは別に過度な要求じゃないだろ？」

「ええ、まあ……」

マスターは言葉尻に含みを残しながら曖昧あいまいに頷く。俺が手元にある水割りを飲み干し、

「もう一杯くれよ。同じものを」

と言つて、締めていたネクタイを緩める。マスターが新たに酒を作り始めた。極上の一杯が目の前で作られている。これを飲みさえすれば気持ちがかかなり変わるのだ。ものの数分で、また新たに酒が用意された。差し出された水割りを飲むと、気分がガラリと変わり、「今夜もいい夜になりそうだな」

と言った。マスターもクーラーが利いている店内でビンからグラスにビールを注ぎ、飲み始める。やはり喉が渴くのだろう。目の前の男の気持ち痛いほど分かる。接客なので神経を遣うのだ。その

補修としてアルコールを含むものと思われた。一夜が過ぎていく。疲れているのはお互い様だったし……。

＊
店内は閑散かんさんとしている。やはりこの手の店は今時、あまり流行らないのだろう。俺も単に酒を飲む場所として利用するだけだった。独りの家に帰って手酌てしやくじゃあまりにも侘わびし過ぎる。別れて出ていった妻と二人の子供のことを想うと胸が痛い。してやれなかったことが多すぎたから、多分愛想を尽かしてしまったのだろう。俺自身、そう思えばやりきれなさを感じている。まあ、別に一人で暮らすことには慣れてしまったし、妻や子供の携帯の番号やアドレスなどは残らず削除してしまっていたのだが……。

マスターと一緒に飲みながら酔っ払う。別にこういったことは今に始まったわけじゃなくて、会社経営が上手くいってなかったときや、妻との離婚に踏み切ったときなどもここに来て、アルコールで紛らわせていた。酒を飲むのは悪いことじゃないと思う。ただ酒癖が悪いと言われたことがあった。それは今でも痛感している。店が終わる午後十一時半前に席を立ち、飲み代しよを支払うためカードを取り出す。そして清算が済むと、店外へ歩き出した。バーの空気はタバコの煙で汚れていてニコチン臭が移るのだが、俺も気分転換に軽く吸うのだ。ニコチンもアルコール同様、俺にとってストレスを取るための格好の代物だった。一人で住んでいる3LDKの無駄に広いマンションへと向かう。溜まっていた疲労はバーで酒で紛らわしたから大丈夫だった。今夜もまた独りで眠ることになる。こんな夜が幾千回続いただろうか……？街を歩きながら、また明日も通常通り仕事があるのを感じていた。自宅までここからすぐだ。一步一步踏みしめながら歩いていく。

＊

翌朝、普通に起き出し、キッチンでホットコーヒーを一杯淹れた。トーストが焼けるのを待って軽めの食事を取る。カバンにはノートパソコンを一台と、資料や書類などを詰めてチャックを閉めた。自

宅の鍵を持ち、家を出る。夏場の疲れはこの時季に出やすい。俺自身、幾分ゆつくりと構えていた。会社役員とはいえ、仕事は部下がほとんどこなしてくれるので、役員室でパソコンを立ち上げてネットに繋ぐ。そしてほぼ一日中情報を見続けていた。一日が終わるとパソコンの電源を落とし、会社を後にする。この繰り返しで日々が過ぎていった。仕事帰りに例のバーで酒を飲むのが楽しみだ。マスターは俺に話を合わせてくれる。きつと寂しさを紛らわせてやりたいたいと思ってきているのだろう。大歓迎なのだった。夜な夜ないろんな話題で盛り上がるのだし。その夜もバーを訪れ、カウンター席に座ると、マスターが、

「ああ、いらつしやい」

と言つて、何も言わなくてもいつも飲む水割りを作ってくれる。じつと待っていた。酒が出来るのを。そして酒を作る合間にマスターが話す面白い話を聞きながら……。辺りは夜の帳が下りるのに相応しく大人の客が集い、絶えず談笑していた。俺はマスターの手元ばかり見つめている。この季節、氷で冷やしたアルコール類はとても美味しい。マスターが作った酒を差し出し、

「どつぞ」

と言つた。そして俺が口を付けるのと同時に飲み始める。今夜もいつもと同じく、いい夜になりそうだった。この空間は実に特殊なのである。大人が酒を飲む場だ。ネクタイを緩めて寛ぎながら、昼間溜まっていた疲れを解す。ゆつくりと、しかも何気ない感じで……。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1491w/>

バー

2011年10月4日07時12分発行